ASADA 通信

Vol. 100

2023年2月

今月のテーマ

Ⅰ 国枝慎吾選手 現役引退
逆境を克服して掴んだ
車いすテニス世界王者

Ⅱ 飲む中絶薬の承認を了承
女性の負担軽減に道が開かれる

Ⅲ 迫る「相続税と贈与税の一体化」

Ⅳ 秀人のつぶやき
～2023ラグビーワールドカップ～

想いをのせて 感謝 ありがとう

新型コロナウイルスも遂に3年を経過した。
岸田首相は12月20日に感染症法上の位置付けを今春5月のゴールデンウイーク過ぎに実施することを表明した。
季節性インフルエンザと同等の『5類』に引き下げる。
関係閣僚と官邸で協議し、移行に向け具体的な準備を進めるよう指示した。
首相は「平時の日本を取り戻していくためにさまざまな政策措置を段階的に移行する」と述べた。
ただ、感染症対策分科会の尾身茂会長は「第8波に入りつつある」と述べている。政府は第8波に備え、都道府県が行動自粛を呼びかけやすくする仕組み設けることが重要ととらえ、この件に関しての取り組み方法を『新型コロナウイルス感染症対策分科会』で提案するとしている。『5類』に移行することは確かに経済を戻すことに繋がり大事であるが、国民の意見は賛否両論に分かれている。

2020年急激な猛威をふるい、あっという間に世界中へと爆発的に広がったコロナウイルス。
3年経ってもまだその影響は続いている。
しかし、コロナ禍で人々はその暮らしに対応をする知恵を生み出したり、これまで当たり前だった日常生活の大切さを改めて実感するなど、前向きな成果も沢山ある。
感染症の流行は何千年も前から繰り返されている。
人類史上、最大の被害をもたらした感染症は「天然痘」(紀元前～)といわれている。
もともと数万年前にアフリカで発生し、17世紀にインドで強毒化すると、18世紀末にはヨーロッパで毎年20~60万人、20世紀初頭には3~5億人を死に追いやった。
しかし、1980年5月に『天然痘』についてWHOは世界根絶宣言をした。人類史上たったひとつ、この『天然痘』だけが世界根絶宣言をしたのだ。
「ペスト」「黒死病」「スペイン風邪」その他の感染症も根絶したことは認められていない。密かに身を隠して次の出番を待っているのかも知れない。だから私達はこれからも感染症とは共存していかねばならないのだろう。

今年も2月14日は『バレンタインデー』です。
愛をこめて六花亭のチョコレートを同封させていただきました。六花亭の地元は北海道の帯広です。
地元の話ですと、前々から嫁をもらうなら『六花亭に勤めていた女性』と言われていたそうです。「何故ですか？」とたずねたところ「六花亭は礼儀作法などしっかり教育しているから」でした。その上『働きがいの社員幸福度、日本NO.1』の従業員さんが作ったチョコレートです。だからでしょうか、とても美味しいです！

では『バレンタイン』って何？“ヴァレンタイン”と呼ばれるキリスト教の聖職者(3世紀の人)の記念日なのです。当時のローマ皇帝『クラウディス2世』は、兵士たちが、愛する人から離れることで士気が下がるのを恐れて結婚を禁止したのです。悲しんでいる兵士たちを憐み、皇帝に秘密で兵士たちを結婚させていたのですが、皇帝に知られたので、命令に背いたと処刑されのです。それが2月14日だったので「愛の告白日」としたのです。

サラリーマン川柳

マイケルの 真似を発作と 間違われ

秀人のつぶやき ～2023 ラグビーワールドカップ～

２０２３年 今年最初の〈麻田秀人の部屋〉『今年はラグビーの年だぁ～!!』

皆様、今号は2023年、今年最初のASADA通信となりますので、改めまして本年も宜しくお願い申し上げます！

お元気でいらっしゃいますでしょうか？元気は“気”からですから、まずは気持ちから「自分は元気だ！」と思い込んで参りましょう！そしたら自ずと元気になるはず。科学的な根拠はありませんが！

昨年はサッカーのワールドカップで日本中が熱く盛り上がりましたね～。各スポーツ、ワールドカップを行っている競技はいくつかありますが、今年は『ラグビー』のワールドカップが９月に行われます！
実は私、高校の時にラグビーをやっていました！当時50kgちょっとしかない体重でよくやってたなぁ、と自分でも思いますが、周りからも“チャレンジャー”と言われていました。
そんなこんなで今回はラグビーの話題をお送りしたいと思います！

今年行われる2023ラグビーワールドカップは、１０回目の開催となります。記念すべき初めての第１回大会は1987年にニュージーランドとオーストラリアでの共同開催として行われました。サッカーのワールドカップと比べると歴史は浅いですよね。それは、ラグビーはアマチュアリズムの精神が根付いており、“アマチュアスポーツ”であるラグビー、の運営の中心である国際ラグビーフットボール評議会側は、プロ化に進んでしまうという懸念を常に持っていて、大会の実行に否定的だったんですね。ラグビーが生まれたのは1820年～1830年の間と言われていますので、こんな長い歴史のあるスポーツであることを考えると、ワールドカップの開催までに相当な時間がかかったと言えますよね。
それだけ先程の“アマチュアリズム”の精神、考え方が強かったのですね。

ちなみにラグビーが生まれた瞬間とされる話として、1823年イギリスのラグビー校でウェブ・エリス少年が、足で行うフットボールの試合中にボールを手に持って走ったことがラグビーの発祥と言われています。

1987年	第1回	ニュージーランド
1991年	第2回	オーストラリア
1995年	第3回	南アフリカ
1999年	第4回	オーストラリア
2003年	第5回	イングランド
2007年	第6回	南アフリカ
2011年	第7回	ニュージーランド
2015年	第8回	ニュージーランド
2019年	第9回	南アフリカ

それではワールドカップの過去の優勝国を見て参りましょう。
ご覧の通り、9回中南半球の国が8回も優勝していて、北半球の国は１度だけ。ましてや発祥の国イギリスにおいては第5回大会のイングランドの1度だけという結果。つまりラグビーの国際大会をリードするのは、このニュージーランド、南アフリカ、オーストラリアとなっていて、それを追いかけているのがフランス、イングランドをはじめてとするイギリス勢、といった構図になっております。なのでワールドカップの一つの見方とすると、南半球のこの３か国を北半球勢が打ち負かせるのか、といった形で観るとまた楽しめると思います。

我らが日本。第１回大会は、やはり海外との力の差が大きく、３戦全敗という結果でありました。

第2回大会での切り札
左WTB吉田義人選手

それから宿沢ジャパンとして臨んだ**第２回大会**、
平尾誠二主将を中心に、WTBの吉田義人をトライゲッターとしてまとまり、ジンバブエ戦で記念すべきワールドカップ初勝利を挙げました！ただそこから世界との力の差を縮めることができず、３～７までの５大会で引き分けはあったものの、勝利を挙げることができませんでした。

第2回大会で活躍する
平尾主将ら日本代表

第8回大会
強豪南アフリカを撃破した日本代表

そして**2015年の第８回のイングランド大会**。エディ・ジョーンズヘッドコーチを率いる日本代表は、スポーツ史、**ラグビー史に残る**大番狂わせを演じるのです。
あの南半球の強豪、南アフリカに対して最後の最後まで全員一丸で攻め抜き、終了間際に奇跡の逆転トライをもぎ取り、34-32のスコアで歴史的勝利を挙げたのです！まさにジャイアントキリング！
続く**第９回**は日本で行われ、予選で４連勝し、初のベスト８入りを果たし、更なる進歩を見せつけたのです！

さあ、そして今年です！フランスで行われる**2023年第10回大会**。日本代表にはまた世界を驚かせる戦いを見せつけてもらいたい、そして歓喜の勝利を日本中で共有したい、そう思っております！

今号はこんなお話でした。これからもいろんな情報を発信していきますので今年もまた宜しくお願い致します！

信頼と実績で皆様に愛されて36年！
生命保険・不動産の売却・買い取り すべてお任せください！

Qualifying & Life Member MDRT®

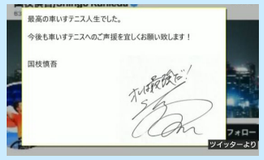
株式会社オフィスASADA

代表取締役 麻田 春江

住所：〒302-0015 茨城県取手市井野台1-7-28 E-mail：officeasada220@gmail.com
TEL：0297-72-2401 FAX:0297-72-6217 URL：https://officeasada.com

Ⅰ　国枝慎吾選手　現役引退
逆境を克服して掴んだ車いすテニス世界王者

２月3日 車いすテニス・国枝慎吾さんに国民栄誉賞の授与検討　松野官房長官発表！



車いすテニスの世界王者で、すべての四大大会とパラリンピックで優勝をし、数々の偉業を成し遂げた国枝慎吾選手が、1月22日をもって現役を引退した。

38歳の国枝選手は、おととしの東京オリンピックのシングルで金メダルを獲得し、去年は長年の悲願だったウィンブルドン選手権を制して、すべての四大大会とパラリンピックで優勝する『生涯ゴールデンスラム』を達成した。

モチベーションの支えになったのが、
「オレは最強だ！」という“魔法のことば”

このことばを送ったのは、国枝選手が全幅の信頼を寄せるオーストラリア人のメンタルトレーナー、アン・クイン氏。
2人の出会いは2006年1月、全豪オープンの会場だった。
当時の国枝選手は、世界ランキング10位に入るか入らないかの選手。それがたった10か月で世界ランキング1位に上り詰めていた。

2人が出会った日、国枝選手はクインさんに「僕は世界一になれると思いますか？」と尋ねるとクインさんが「そう思う？」と尋ね返すと、国枝選手は「なりたいです」と答えた。
でも、クインさんの目には、その姿は「自分自身を信じていないような感じ」に映ったという。
そこで、こんなアドバイスを送った。
「『なりたい』ではなく、『なる』と毎日言いなさい」
「慎吾、鏡の前で毎日**『オレは最強だ！』**と言い続けなさい」
さらに、クインさんは国枝選手を選手用の食堂に案内し、
皆の前で**「オレは最強だ！」**と叫ぶよう促した。
こうして“**魔法のことば**”を伝えたのだ。

ラケットに書いた魔法のことば

アン・クイン氏と国枝選手

“**魔法のことば**”と出会ってから15年後の国枝選手にとって決して絶好調ではなかった東京パラリンピック。
その時も、鏡の前で何回も何回も言い聞かせ、自信が持てなかったみずからを奮い立たせたという。
「オレは最強だ！」この言葉によって、国枝慎吾という最強のプレーヤーが生み出され、
最強であり続けることができたのだ。

車いすテニスはツーバウンドでの返球が可能だ。だが、国枝選手は、巧みなチェアさばきで、右に左にターンしつつ、多くをノーバウンド、ワンバウンドで打ち返す。このスーパープレーはパラスポーツの見方も変えた。
国枝選手は子どものころから車椅子に乗り、障害のあるなし抜きに、学校の友だちとスポーツを楽しんだ。
「できない」と考えるより、その思い込みををとっぱらい、一歩を踏み出した。
そんな技巧を超えてのプレーが、人の心を揺さぶる理由なのだろう。

約17年にわたり車いすテニス界の頂点に立ち続けてきた陰には、想像を絶する苦悩や挫折を乗り越え“復活”と“進化”があったのだ。
東京パラリンピックで見せた素晴らしいプレーと涙には2009年にプロ宣言をして以来、プレーを通じて競技の魅力を発信することを使命としてきた国枝選手の教示が凝縮されていた。

Ⅱ　飲む中絶薬の承認を了承
女性の負担軽減に道が開かれる

厚生労働省の専門部会は1月27日、飲む人工妊娠中絶薬の承認を了承した。承認されれば国内初となる。

手術しかなかった中絶に新たな選択肢が加わる。海外では30年前から中絶薬を使っている。女性の心身の負担を軽減できるとして国内承認を望む声がずっと前から上がっていた。

中絶薬は英・製薬会社ラインファーマが2021年12月に承認申請した『メフィーゴパック』。

社会的関心が高いことからパブリックコメントを実施する。3月に薬事、食品衛生審議会(厚労省の諮問機関)の分科会で改めて審議したうえで、厚労省が承認を最終決定する。

妊娠の維持に必要な黄体ホルモンの働きを抑制する『ミフェプリストン』と子宮収縮を起こす『ミソプロストール』の2つの薬を時間をずらして飲み、子宮の内容物を体外に出す。母体保護法の指定医のもとでないと受診できない。
使用時期は妊娠9週以内でないと使用は出来ない。今のところ公的保険の対象外となる見通しである。
既に国内でも治験を行ってきた。中絶を希望する妊婦120人を対象に実施し、93、3%が24時間以内に中絶に至った。腹痛30%や嘔吐21%などの副作用が出たが、多くは軽度や中等度だった。

国内では中絶の手段が手術しかなかった。胎児をかき出す『掻爬(そうは)法』か『吸引法』の2通りがあり、世界保健機構(WHO)は、子宮を傷つける恐れがある掻爬法は『時代遅れ』として推奨せず、中絶薬と吸引法を推奨している。手術費用が10万円～20万円になることも多く、身体と経済的な負担の大きさが指摘されていた。
守るべきは女性の心身の健康と安全である。中絶をせざるを得ない妊婦にとって、飲み薬は身体を守る重要な手段となるだろう。

ただし、飲み薬が登場するからといって中絶が手軽になると捉えるのは間違いである。どんな手段であっても中絶が重い判断であることに変わりはない。決して忘れてはならないことである。
新たな薬の登場で懸念されるのは、闇ルートで取引され不正に使用されることである。命の危険がある点だ。
経口中絶薬の承認は『中絶の権利』を含む女性の『リプロダクティブ・ヘルス(性と生殖に関する健康)』の観点で注目されていた。
日本は中絶や避妊などへの理解が諸外国と比べて周回遅れと指摘されてきた。
例えば、国連が19年に実施した避妊方法に関する国際調査で、ピルの使用割合はフランス33%や米国14%に比べて日本は3%にとどまる。

今回の承認は,長い間、国に対して法案成立を願い続けた「女性医療ネットワークの性差医療推進」に携わる人達の熱い思いとその思いを共有する全ての人達の熱い思いが国を動かしたと捉えるべきだと思う。
女性が子どもを産みたい時に産み育て、社会でも家庭でも活躍でき、真の幸せ感が持てる女性が一人でも多くなる社会へ向けての第一歩になると思う。

Ⅲ　迫る『相続税と贈与税の一本化』

令和5年度税制改正大綱によって、令和6年1月1日以降の贈与より、相続開始前の贈与が相続財産へ加算される期間が死亡3年前から7年前へと延長されることが決定され、相続発生時に持ち戻すことになった。

贈与税とは、個人から預金や土地、株式などの財産を受け取った人に課せられる税金のこと。

孫の生前贈与も持ち戻しの対象になる可能性があるのでは？早くから贈与してしまえば相続財産を減らすことが出来るだろうと考える方もいると思うが…。ちょっと待って！慌てないで考えよう！
贈与された子や孫がそのお金などを大切にしてくれれば良いのだが、もし仮に“あっという間に使ってしまった”としたら？
目の前に思いがけない“お金”が舞い降りてきたら使いたくなるのも世の常だろう。しかも人生が狂うかも？

国は少しでも税金を取りたいのが本音だろう。
老人がいつまでもお金を握っていないでさっさと渡して、若い人は使って…！
「経済が廻るから」「消費税が増えるから」こんな見方はうがった見方だろうか？

親は努力して働いて貯めたお金を、子や孫に『親心』として早くから渡しても
『親の心、子知らず』で、あっという間に使われたら。「それでいいんだよ～」はよっぽど心の広い人なんだろう！